

■惑星 Drummum, Karl Starved 王国首都——Zip本社ビル

「もうソロソロだね。」

溜息をつきながら、虚ろな目の齋が言った。

「何がさ……。」

鵜が、これまた虚ろの目で、ゆっくりと齋の方を振り向いた。生気が、感じられない。

「久木のお見合い……。」

ボソツと、齋は答えた。

「そうね。上手くいってるかね。」

また、首をもとの位置に戻して、鵜は呟いた。

「ハーレムの数も、減ったよね。」

械が、齋のとなりにチヨコンと座って、話しかけた。彼女の目も虚ろで、生気が感じられない。どの娘も、生きるのに疲れたといった感じだ。

「ホント。Valiaも、少しずつだけど、着実に減らしたわよね。」

ハアツと溜息をついて、齋は言った。

「結局残ってるのは、あたいら五人だけかあ……。」

鵜は、ボーツと明滅するディスプレイを眺めているだけだった。ディスプレイの淡い光が、鵜の顔を反射する。青白い光の

ため、鵜の顔を、さらに死人のようにみせる。

「私達の事、嫌いになったんでしょか？」

四人の娘が駄弁っているはるか後方で、キーボードのキーを叩いていた秧鷄も、のっそりとやってきて、会話に参加した。

「ボクらは、こんなにヴァルアにお慕いしているのに……。」

械が、両手を組んで、うるうるしてみせた。

「久木、見合いが上手く行ったら、ハーレムから抜けちゃうのかなあ。」

齋が、声を震わせて言った。

「そりゃあ……ね。」

鵜が、ボソツと応える。

「この間、立て続けに、出て行っちゃったよね。あれからどれくらい経つんだろ。」

もう、涙顔になって、齋が言葉を続ける。

「百年ぐらいじゃない？」

械が、ボソツと応える。

「百年しか経ってないのに、また別れるなんて……。」

齋は、両手で、顔を覆った。

「ヴァルアだって、つらいと思うよ。いつだったか、二ヶ月くらい、自室にこもってたし……。」

鵜が、静かに応えた。

「ハーレム解散……か……。」

械が、自分のデスクから持ってきたジュースを、一気に飲み干した。

「そんな事、考えた事、一度もなかった……よ。」

空になった、ジュースの缶を、コトンと自分の足元におくと、

そう付け加えた。

■カールスタード王国首都——ウエストシティ(W.S.)

「悪い……。ほんとーに、すまねーと思ってる。」

山茶は、外方を向いてい歩いている久木に腰をかかめていた。

彼女は、自分の左手で謝辞の言葉を連発している山茶を黙殺し、黙って歩き続けていた。

そんな二人のあとを、苦笑を浮かべながらヴァルアがついてくる。

久木は、泣きたい思いだった。ハーレムとの別れの踏ん切りがついたところだったのに。

『これでまた、ハーレムから抜けられなくなっちゃう……。』

彼女は、そう心の中でつぶやいた。

彼女の頭の中では、見合いをぶちこわしてくれた瞬間の映像が、何度もしびとされていった。山茶の暴言。そりゃあ、相手の男性も言葉を選ばなかったのは、問題あるかも知れないけど……。久木は、ふと落ちついた。

「山茶、もう止めなさい。」

不意に、ヴァルアが口を開いた。

山茶は、立ち止まって、ヴァルアの方を向く。

久木は、そのままツカツカと歩いて行ってしまふ。

「あなたも、少しは久木の気持ちを汲み取りなさい。」

山茶に言い聞かせるように、ヴァルアは山茶につめよった。

今回の見合いの仲人は、このヴァルアである。山茶は、ヴァルアの面目をもつぶしてくれたのだが、どうも山茶自身は久木

の方しか頭にならないらしい。

「久木の気持ちぐらい、解らいでか!!!」

山茶が、元氣よく言い返す。

「はあ! 山茶は連れてこない方が良かったわ。」

ヴァルアは、頭を抱えてため息をついた。

「悪かったな!!!」

山茶は、吐き捨てるようにそう叫ぶと、彼女までもが外方を向いて歩き出してしまった。

ヴァルアが、山茶の背中をながめながら、再び小さなため息をつく。山茶は、久木のそばに駆けていって、また同じ事を繰り返していった。

「うっるさーい!!!」

ついに久木が切れる。

しばらくして、久木が山茶に向かって、そう叫んでいた。

ヴァルアはそれを見てから、歩き出した。

■ZIP本社ビル

「鶴……。」

械が、コツンと鶴の頭に自分の頭をくつつけて、話しかけた。

「あによ。」

めんどくさそうに、鶴が返事をする。

「鶴さあ、何回くらい、断った? ……見合いの話……。」

鶴の肩にもたれ掛かって、械は、ボーッとしている目を、閉じた。

「知らないわよ、そんな事。」

械から、目を外らし、鶴は答えた。

「ふーん。薺は？」

それから、薺の方へ、頭を向けて、ターゲットを変更する。

「二〇回。」

指を二本立てて、薺が言う。

「二〇回かあ……。」

溜息混じりに、械は切なそうに呟いた。

「わざと、見合いを駄目にしてる事、ヴァルア、気付いてく  
れてんのかなあ？」

薺は、ハアツとばかりに、溜息をつく。

「それでも、ハーレムを解散させたいんですよ。」

もう一本、ジュースの缶をとってきた械は、プシュッと蓋を  
開ける。

炭酸があふれ、冷えきったジュースが、械の手にかかるが、

彼女は、それをじっと眺めているだけだった。

「でも、秧鶏くひながまだ残っているってのが、あたいは不思議だ  
な。」

不意に、鶴が振り向いて、三人が駄弁っているのを静かに聞  
いている秧鶏を見た。

三人の視線が、一斉に、秧鶏に集中する。

秧鶏は、械からもらったジュースを、チビリチビリと飲んで  
いた。

「ほーんと。ヴァルアがあんなに強く、秧鶏に言ったのに、  
よく負けなかったね。」

械が、水鶏の顔をのぞき込んだ。

「私だって……。つかかったですよ。自分さえ我侷わがままを言わなか

ったら、ヴァルアが少しでも楽になるって……。知ってたけど……  
：それじゃあ、何のために今まで生きてきたのかって……。だ  
から、もう少し、ヴァルアが何をしようとしているのか、解る  
まではいようと思って……。」

ブツブツ、小さい声で、水鶏は答えた。

「そうだよ。ボク達が何のために、こうして生きてきたのか、  
わかんないもんねえ……。」

納得するように、械が言った。

#### ■カールスタード——首都近郊区

「ココだよ、ココ。」

閑静な住宅街には行った三人は、とある白い家の前で立ち止  
まった。

中央に公園を構えるこの近郊住宅地域は、東西に展開される  
都市部へのベッド

りとした敷地取りは、公園とその真ん中を通り抜けるアベニ  
ーを中心に広がっていた。

Z i p 社は、この住宅街を抜け、東側のシテイ（イースト  
シティーES）に存在する。

山茶は、その家の前に建って、親指でその表札を指していた。  
「Bellfuer? ああ! 桔梗? へー、こんな所に住んでたん  
だ。」

表札を読みとった久木は、その中に聞いたことのある名前を  
見つけた。そして、目を丸くしてそう言ったのだ。

その表情には、なつかしさの中にも、うらやましさのような

ものが含まれていた。

「一〇〇年近く前になるな……。」

山茶が、少し遠い目をした。

ヴァルアは、家の二階の方を一瞥すると、何も言わずに歩き出した。

「おっ？」

山茶の視線が、ヴァルアの姿を追う。

「はーん。」

そして、何かに気付いたのか、薄笑いを浮かべた。

「ちょっと、寄ってみっか？」

山茶は、その微かな笑いを浮かべながら、久木に焦点を合わせた。

「また!!! そーいうデリカシーのないことを!!! 少しは自分のその行動基準を改めたら?」

久木が、ヤレヤレと呆れたような声を出した。

「いーよ、お前は帰れ帰れ!」

山茶は口をとがらして、久木を追い払う。

「もう……、勝手にどーぞ!!!」

久木は、最初少し何か言おうとしたが、ヴァルアの後を追うべく、イーストシティに向かって駆けていった。

山茶は、一寸、眉間にシワを寄せたが、気を取り直して、玄関に入ってしまった。

玄関の敷石は掃除が行き届いており、踏むのが惜しまれる。しかし、庭に植えてある人工芝と、灌木は、あまりにも人工的

で当たり前すぎる。

山茶は、扉にある呼び鈴を押した。

音声合成による呼び出し音が、インターホンのスピーカーから聞こえてくる。おそらく家の中でも、こだましていることだろう。

しばらく家の中は、シーンとしていたが、おもむろにパタパタという音が中から聞こえてきた。

カチリというキーの外される音が鳴り、少しドアが開かれた。

「あ、どーも。」

どこもない調子で、山茶が口を開いた。

「はい? どなたですか?」

中から顔をのぞかせたのは、一六、七歳とおぼしき娘ッコ。

その顔のつくりは、桔梗を彷彿とさせるに充分だった。山茶の心に、一瞬切ない感触が通り過ぎた。

笑顔をつくらって、山茶は言葉が続けた。

「私は、むかしベルファさんに世話になった者だが……。ベルファさんはおられますか?」

しかし、口調は固めだ。真面目を装うためだろうか?

玄関の娘は、表情が和らぎ、ドアを全開にした。

「祖母のお知り合いですか? ええおります。しばらくお待ち下さい。」

そして丁寧な口調で言葉を返すと、

「おばーちゃん!!! お客さん!!!」  
まだまだ子どもを思わせる口調が発せられた。パタパタと、

ドラムメンの平均寿命は、一二〇〜一三〇年。

スリッパが地面を叩く音が続き、彼女は廊下の奥へと消えてゆく。

山茶は、クスツと微笑した。

\* \* \*

ゆったりとしたソファ。山茶は、身体を半分沈めて、そこに腰掛けていた。

彼女の向かいのソファには、老婆が一人。老婆は少しうつむきかげんで、そのソファに沈んでいる。

二人の左手には、レンガ造りの暖炉がある。

暖炉は灯をともしてからかなり時間が経っているらしく、部屋は多少一酸化炭素臭く、かけてあるヤカンからは、かすかな水蒸気が立ち昇っていた。

この地方では冬は始まったばかり。雪が降り始めるのは、あと二月も先だろう。

「変わったな……。」

山茶は、少しあざけり気味な口調で話を切りだした。

老婆が少し身体を揺らして、顔を上げる。

そして、シワだらけの顎を動かして、かすかに笑った。

「聞いたよ。娘の名前が *Louisa*、孫の名前が *Qualazia* っていうんだってな。よく、周りの者が反対しなかったな。」

山茶は、笑いを浮かべながらそんなことを言う。

しかし、それも無理ないことかも知れない。考えてみれば、彼女のベルファとして生きた時間は、桔梗として生きた時間に較べてあまりにも短い。ハーレム時代のことが、ベルファになったあとも充分影響するのも、無理ないことである。

山茶は、いろいろと頭の中で、過ぎらせながら、老婆を見下ろしていた。

桔梗は、山茶の顔を見上げたり、うつむいたり、時折自分の手であそんでみたりしている。山茶の声が届いているのかどうか、それはさっぱり解らない。

「この星の食べ物には、いつ慣れたんだ？ 最初の頃は、料理が作れんと言ってたうちに来ていたが……。三〇も過ぎるとさすがに來なくなつたな。」

それから山茶は、桔梗自身がハーレムから抜けたときのことを思い出していた。

よくヴァルアの家の戸を叩いては、メシを食らいに来ていた。そして、目じりにシワが出来る頃の桔梗の笑顔思い出す。

「ハーレムとともに暮らすことは、かなわぬ事も……。」

少し震えた声で、山茶は言葉が続ける。

相変わらず、老婆は同じ動作を繰り返していた。

「……………」

山茶は、のけぞって、背中をソファにゆだねた。

足を、組む。

彼女の視線は、天井に向けられていた。

ラング語（カールスタードの言語）で、躑躅の義。躑躅は、桔梗のハーレム時代の相棒。  
ラング語で、山茶の義。

『桔梗は、俺のことを、どう思っていたのだろう……。』

『憎んでいるだろうか？』

『ベルファとして過ごした時間は、桔梗にとってどんな時間だったのだろう……。』

『俺が、人間に戻ったとき、俺は、俺を、ヴァルアを、ハーレムを、どう思うのだろう……。』

山茶の頭の中に、あらゆる記憶が思い起こされる。

すべては過ぎ去った出来事であり、この星の、誰も知らない、知ることのできない記憶である。

初めて、人を殺めた時……。体中を走る振動と、青く、薄い煙。心臓に届く、冷たい金属感。そして、音。頭の中で、リフレインされる、アタックの強いエンベロープは、今でも忘れられない。

ホンの一瞬が、まるで数時間ののような感覚に襲われたのを憶えている。

この記憶を知っているのは、この世界には、俺と、ヴァルアと……。神ぐらいなモンか……。

上を見つめたまま、彼女は、溜息を吐いた。

コンコン……。ガチャリ。

扉がノックされ、木製の重いドアが開かれる。

音もなく、それは動き続けた。

山茶の、視線だけが、扉の方へ移動する。

「すみません、何もおかないでなくて。」

ベルファの孫である、カレティアが、盆を手に入ってきた。

彼女は、山茶の前にあるガラス

せると、カップに紅茶を注いだ。

山茶が、姿勢を正し、軽く礼をする。

「びっくりなされたでしょう、おばあ……。祖母がこんな状態だったなんて。」

少しうつむいて、カレティアは話し出した。

「ええ……。正直、驚きましたよ。いつからですか？」

山茶は、彼女の会話にあわせるかのように、口を開いた。

「もう三年にもなります。私たちも苦労しておりますけど、なによりも大変なのは、祖母本人なんじゃないかなって……。』

カレティアは、山茶の方をむいて、そう答えた。

山茶の表情が、一瞬、曇る。

「ごめんさい、こんな形でお会いすることになってしまっ……。つもる話でもあったでしょうに……。』

そして、カレティアは、またうつむいた。

「何も、あなたが謝ることはないですよ。時間がそうさせたのですから……。』

柔らかい口調で、山茶は、老婆を見やった。

「会えただけでも充分ですよ。おかげで、いろいろ考えることも、失ったものを思い出すこともできましたしね。」

山茶はそう言うと、少し笑って、カレティアの方を見た。

桔梗……。

目の辺りや、鼻立ちがカレティアと桔梗はそっくりだった。

カレティアは、山茶の視線に気付くと、山茶の方へ向き直った。

た。

「何か……？」

そして、小さな声でそう言った。

山茶は、その声に反応してピクツとすると、カレティアを視

界から外した。

「いや、別に……。ベルファが君ぐらいのときとオーパーラックプしてね……。」

っと、言った瞬間山茶は、冷や汗をかく。

カレティアが、怪訝そうな表情で、視線をそらす山茶を見つめた。

ヤバかったかな？ 俺もあまちゃんだな……。

「あの、お名前をお聞きしていませんけど……。」

カレティアが、怪訝そうな表情を隠さずに、山茶に問いかける。

チッ。

山茶は、心の中で、舌を打った。

「いや、申し訳ない。私は、君と同じ名前を持つ者だ。」

えーい、どうとでもなれ。

山茶は、そう答えると、カレティアに視線を合わせた。

「はあ、カレティア……ですか？」

少し照れたような口調で、カレティアは聞き返した。

「君の名前は、私の名前から来ているみたいだからね。」

そして、山茶は微笑む。

カレティアの顔が、少し赤くなったような気がした。

山茶は、ホッと一息つく。

「あの……。」

「もう少し、二人だけにさせてもらえませんか？ まだ、なくしたものを思い出せるような気がするんで。」

カレティアが、何かを言い出そうとしたとき、山茶はそれを消した。

少し、濁いた笑いを浮かべた山茶は、カレティアを見つめる。その笑みは、何か悲しみを誘うような感じだった。

カレティアは、続きの言葉が言えなくなり、口ごもる。

ヤレヤレ……、ここまで脅してやれば、質問できまい。

ゴメンよ、カレティアちゃん。

山茶は、心の中でそうつぶやいた。

「どうも、失礼しました。」

しばしの沈黙を破って、カレティアは、この部屋から去っていった。何か、後ろ髪引かれる思いを残して。

山茶は、カレティアが出ていったドアをしばらく見つめていたが、また目の前の老婆へと視線を移した。

紅茶を手取る。

かすかな湯気が、山茶の鼻をくすぐった。

俺達の……いや、俺のやったことは、人間から見たら、どう

見えるのだろうか？

ヴァルアのやっていることは……？

『狂ってる。』

強制的に命を与えられ、多くの苦しみと、悲しみと、喜びと、楽しみをつかまされ、目的も解らず、生き続け……。

そして、今になって、適当な配偶者や生活環境があてがわれ、寿命を与えられる。

今まで生きてきた記憶と、これからやってくる死の狭間に立たされて、どうやって過ごしてきたのだろうか？ いっそ、この記憶がなくなればよいと、今すぐに死が訪れて欲しいと、何

度想ったことだろう  
『狂ってる。狂ってるよなあ。』

山茶は、立ち上がると、老婆の隣へ来て腰をかがめた。そして、握れば折れてしまいそうな、老婆の細い腕をそっと手に取った。

「俺だ……。山茶だ……。解るか？」

山茶は、つぶやくような声で、ベルファに問いかける。

老婆は、うつろにも、前を向いているだけだった。

「解らんか……。」

山茶はうなだれると、しばらくじっとしていた。

老婆の手は、冷たく、まるで骨をつかんでいるようだった。

まだ一〇〇年しか経っていないのに、桔梗、ベルファの身体は、なんと衰退してしまったことだろう。もはや、この身体が機能し続けている時間は、いくばくもないであろう。

「桔梗……。俺は、死んでいった仲間や、おまえに對して、何をしてやればよかったのだろうか？ 何をすればいいのだろうか？」

山茶は、そっと手を離すと、立ち上がった。

老婆に、変わりはない。

グイッと、テーブルの上に残っていた紅茶を飲み干す。

小さな苦みが、山茶の舌を刺激する。

カチリ……。

彼女は、テーブルの上に、静かにカップをおいた。

\* \* \*

「どちら様ですか？」

四〇も後半を迎えた女性が、山茶をみやってそう言った。

「これは、申し遅れました。私、カレティアともうします……。」

山茶は、深く礼をすると、手に持っていた花束を、そっとその女性に渡した。

「ああ、あなたが？ 娘から聞いておりますわ。娘と同じ名前の方が尋ねてきたって。あの時は、私たちも留守で、何もおかないもせず……。」

礼をしながら、花束を受け取った女性は、山茶の顔を見上げた。

「いえいえ、私こそ、突然おじゃましてしまいました。」

少し、照れたように笑った。

「よろしいですか？」

そして、部屋の奥へ視線を移すと、そう尋ねた。

「どうぞ、どうぞ。母も、喜んでおられるでしょう。」

山茶が、一瞬、顔をゆがめた。

喜んでる？ いや、顔も見たくないかも知れないな。

山茶は、傷心しながらも、部屋の奥へ進んだ。

そこには、白い棺に横たわった老婆がいる。

花に囲まれ、その表情は安らかだった。

山茶が、近づいたからといって、その表情が変わることもない。

当然だが……。山茶はそう心の中でつぶやく。

山茶は、持っていたマシユマロを、老婆の腕に抱かせた。

「おや、義母の好物をよくご存知ですね。」

棺から戻ってきた山茶に、一人の男性が、物静かな声で、そんなことを言った。

「ええ、あの娘がうちに来るときの差し入れは、決まってマシユマロでしたからね。結局、私が食べる前に一人で食べてしまつてね……。」

少し、笑って、山茶はそう答えた。

「義母も、幸福者ですな。」

男性は、そんなことを言った。

■ウエストシティ——エルビム百貨店

「悪い、待たせたな。」

びしっと背広を決めた山茶が、姿を現したのは、午後三時をとうにまわってからだった。

「おっそーい!!」

久木が、いやみったらしく、叫ぶ。

そこには、鵜、齋、水鶏、槭、ヴァルアもいる。

「ま、山茶が時間を守らないのは、今日に始まった事じゃないからね。」

鵜が、あきらめと周知の念を持ってそんなことを言う。

「一〇〇億年以上、変わりませんよねえ。少しは、自分を向上させようと言う気にはならないんですかあ?」

齋が、腕を組んで、そうののしって見せた。

山茶が、うっと一歩後ろへ下がる。

「とにかく、今日はこの間の埋め合わせしてもらうんだから、覚悟しなさいよ。さあ、カードを渡しなさい。」

地球の二四時間制に変換して、約三時相当。

久木が、山茶に詰め寄った。

「おまえら、血も涙もないのか?」

山茶が、ジャケットの内ポケットから財布を取り出しながら、そうつぶやいた。

こ、こいつら、俺が桔梗の件以来、おとなしくしてると想つたら、いい気になりやがって。

「山茶相手に、何を遠慮することがあるの?」

久木が、ウィンクして、山茶を見上げた。

山茶が、動作を止める。

何が言いたいんだよ?

山茶が心の中で、それを言い終わらないうちに、久木は山茶に背を向けた。

「山茶がいるから、私たちがいるんじゃない。そうじゃなかったら、私たち、とっくにつぶれてるわ。」

そして、振り返ると、久木は右手をふって見せた。

久木の右手には、山茶の黒い財布がある。

「あ、つてめー!!」

山茶は、しばらくほうけていたが、ハッと我に返ると、自分の手元を見た。

まだジャケットの内ポケットに入っている右手に、財布は握られていない。

久木が、ペロッと舌を出す。

「キャハハ!!」

娘たちの笑い声が、高い天井にこだました。

お、俺の全財産がー……。

山茶が、遠ざかる久木の、手に捕まれている黒い財布を目で追った。

そこへ、フツと、山茶の視界をヴァルアが遮る。

「どうだった？ ベルファの葬式は。」

マイペースな、しゃがれ声。ヴァルアは、無表情でそう話しかけた。

相変わらず、彼女の前髪は、彼女の表情を隠していた。しかし、山茶には解る。ヴァルアが、どんなに声色を変えたと、口調を変えたと。

一〇〇億年以上も付き合ったりやあな。

「切ないね。何かこう、生きてきた意味ってヤツがすっぱり抜けちゃって。桔梗も、悔しいんだろうな。そう思った。けどよ……。」

山茶は、そこで一拍おいた。

ヴァルアが、口元をかすかに動かして、薄く笑う。

「やっぱり、ハーレムだったことは、後悔してねえと思うんだ。俺、結構……。」

そこで、山茶は言葉を止めた。

ヴァルアの薄笑みが消える。

「久木の一言が効いたな？」

そして、意地悪っぽくそう言った。

山茶の顔がカーッと真っ赤に染まる。

「うるせいやい。だいたい、すべての元凶はおまえなんだぞ。何で俺が、こんな目にあわなきゃならないでい！」

山茶は、いやに落ちついているヴァルアに無性に腹を立てた。

それでもヴァルアは、すましている。

「それも、あなたの仕事よ。」

そして、静かに、一言だけ、そう言った。

山茶の力の抜ける溜息が、聞こえる。

はいはい、解りました。

結局、俺はおまえのオモチャなのね。

「早く行きましょう？ でないと、あなたのカード、おシヤカになるわよ。」

肩を落としている山茶に、ヴァルアは、他人事ひとごとのように声をかけた。

「あ、俺の全財産！！」

山茶が、あわてて我に返る。

山茶の視界には、ヴァルアしかない。他の娘たちは、……もうすでに、売場の中へ。

「あ、あの、ヴァルア社長様？」

すでに歩き出していたヴァルアに、山茶は後ろから声をかけた。

ヴァルアが立ち止まり、後ろを振り向く。その口元には、いたずらっぽい笑みが浮かんでいた。

「今回の出費、Zippの経費で落ちません？」

山茶は、青い顔をして、震える声を出す。

「さあ、それは、あなたの働き次第じゃないかしら？」

ヴァルアは、クスツと笑みを浮かべると、右手で山茶を売場へと招いた。

ヤレヤレ。

二人は顔を見合わせると、デパート内に消えていく。

今頃、五人の娘たちは、狂喜乱舞して店内をうろついていることだろう。